九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

F・ソマド『無秩序の人ドリュ・ラ・ロシェル』

松尾, 剛

https://doi.org/10.15017/8785

出版情報：Stella. 22, pp.135-138, 2003-12-26. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

F・ソマド『無秩序の人ドリュ・ラ・ロシェル』

松　尾　　剛

数多くの文学作品を生みだしながら，しかし同時に現実の政治運動に参加した作家をめぐる言説を前にすると，読者はしばしば一種のフラストレーションを感じてしまう。というのも，文学研究者側からのアプローチは作家の政治思想に関する目配りを欠くことが多く，他方，歴史家たちが作品を扱う手つきは時として粗雑に過ぎ，文学作品の読解としては到底許容しうるものではないからである[1)]。いずれの手になる書を読もうとも，読者は隔靴掻痒の感を免れないというわけだ。

しかもドリュのように，現代史の闇に深くコミットした文学者について考えるとき，事態は一層複雑な様相を帯びてくる。たとえば文学研究者は，ドリュのファシズム思想や人種主義を分析することに多少なりともためらいを感じてしまうはずだ。20 世紀最大の謎とされるファシズムの問題は，今だあまりに生々しく，種々の歴史的・イデオロギー的論争を呼び起こす。ましてやファシズムに関する研究文献は，歴史家の側から年々歳々，陸続と送り出されているのだ。どうして畑違いの学者が，これを論ずるのに躊躇しないでいられようか。かといって，ドリュについて考えようとするのに，彼のファシズムを黙殺したり軽視したりすることなど，到底できない相談だ。そんなことをすれば，危険な作家を無責任に復権させようとしていると非難されるばかりでなく，そもそもドリュの本質的な何かを取り逃がすはめになるだろう。

いっぽうで歴史家たちは，登場人物の思想をそのまま作者の思想と見なしてしまうような，粗雑な作品分析を行うばかりでなく，ファシズムに対する一般的な理解を土台としてドリュを読むという誤りを犯しがちだ。なるほど歴史家である彼のファシズムに対する理解や知識は，文学研究者をはるかに凌駕しているだろう。だがしかし，そもそもファシズムに対する一般的な理解など存在するのだろうか。もしそうであるならば，たとえばナチズムが「汚れた謎の総

体」と呼ばれるはずもあるまい。さらに言えば，このような分析方法を用いたのでは，しょせんドリュとは，歴史家のなかにあらかじめ存在したファシズム理解を強固にするだけの素材に過ぎなくなってしまう。つまりそこではドリュの固有性が捨象されてしまっているのである。

ドリュを読む困難とは畢竟，歴史と文学の狭間に作家が位置していることに起因するといえよう。それゆえ待ち望まれているのは，豊かな歴史理解に立脚した繊細な作品分析なのである。

この知的冒険に対する挑戦が，思わぬ方面からあらわれた。本書『無秩序の人ドリュ・ラ・ロシェル』がそれである[2)]。これを思いもよらぬ方面というのは，著者フレデリック・ソマドは歴史家でもなければ，文学研究者でもなく，政治思想史家でもないからである。彼はモンペリエ第１大学で教鞭を執る社会人類学者なのだ。管見の範囲では，人類学者によるドリュ論というのは初の試みであり，われわれの期待はいやがうえにも高まらざるをえない。じじつソマド自身が，この種の期待に応えるかのように，本書の狙いは「人類学の精神という物差しを用いて」，作品に現れたファシズムを剔抉することにあると序文に述べているのである。果たして彼の目論見は成功しているのだろうか。

まずソマドが明らかにするのは，ドリュにおけるルソー的ともいえる願望である。著者によれば，ドリュが終生願ってやまなかったのは，文明を廃滅し，自然のなかに帰ることであった。幼年期こそが人生の汚れなき黄金時代であると考えていた小説家にとって，人類の黄金時代とはその幼年期，すなわち原始時代にこそあった。よって歴史は必然的にデカダンスの様相を帯びざるをえない。この頽廃する歴史の流れに抗すべく，ドリュはおのれの思想を錬成したのである。

頽落する歴史の歯車を逆転させようと，ドリュは原始時代への回帰を夢見る。それは文化に対する自然（ナチュール）の賛美であり，知性に対する本性（ナチュール）の勝利であり，大人に対する子供の優位であった。だがそれはまた同時に，「前近代的共同体への退行」でもある。なぜなら，現代社会があくまで個人を最小単位として成立しているとすれば，その否定とは「人種的，生物学的，有機的な，それゆえ解体を宿命づけられた全体性へ，おのれの個別性を再び導いてゆく」ことにほかならないのだから。

このような全体性における個体性の消滅は，指導者（シェフ）のカリスマによって可能

となる。作家の戦争体験に由来する，完全無欠な共同体への夢は，カリスマ的人物を指導者に戴くことで可能となるものであった。かくして英雄と，彼を中心に蝟集する男たちからなる共同体が誕生するのだが，その最終目的とは〈死〉にほかならないことに，ソマドは着目する。なぜなら原始時代への回帰を果たそうとする以上，この指導者は現行秩序の破壊者として現れざるをえず，その意味で彼は死をもたらす者だからである。また構成員たちが，共同体への溶解を望む以上，彼らの最終地点は個体の死以外にありえまい[3)]。

かくしてドリュのファシズム思想は完成する。現代世界を体現するかのごとく，「合理性と放埒に，〔…〕生存の〈アポロン的〉理解と〈ディオニュソス的〉理解の間で引き裂かれた」作家は，後者による前者の扼殺を選んだ。「批判的合理性が，道に迷い，理性の合理的破壊に辿り着」いたのである。そして成就されたディオニュソス的自然のなかで，ドリュは自分のなかの矛盾する要素，すなわち生と死，霊と肉，夢と行動，個と全体を，和解させようと試みた。まさに彼は「無秩序の人」だったのであり，ファシズムとは彼の無秩序を許容するディオニュソス的自然の別名だったのである。

以上ごく簡略ながら本書の論旨をまとめてみたが，平凡なドリュ論との印象を与えてしまったのではないかと恐れる。なるほど，作家を矛盾に満ちた無秩序の人と形容し，この無秩序を許容する場としてドリュのファシズムを規定することは，確かに凡庸といえなくもない。そのうえソマドもまた，多くの歴史家同様，ファシズムの〈一般的〉理解から出発するという弊を免れていない。だが本書は，そのような欠点を補ってあまりある長所を持つ。なによりまず，作品の繊細な分析を疎かにしていないところがよい。『シャルルロワの喜劇』における〈自然〉の新たな解釈や，従来未刊の小説とされてきた『ディルク・ラスプの回想』を，それ自体として完結したものとする考察は，充分に興味深く，説得的である。いっぽうで，ふんだんな人類学上の知識を活かして，謎に満ちたドリュの神秘主義を解明しようとする姿勢も素晴らしい。とりわけ，ドリュの神秘思想の源泉として，バタイユらの「コレージュ・ド・ソシオロジー」を論じるエピローグは圧巻である。西洋の危機を合理主義と非合理主義の対立に見，〈聖なるもの〉による克服を目指すバタイユとカイヨワが，明らかにドリュと共通点を持つことを指摘したのは，おそらく著者が初めてではないか。これはいくら賞賛しても賞賛したりないほどの功績であろう。

これを要するに，本書は社会人類学的知識に基づいてドリュ作品を分析した良質の研究書と言えようか。たしかに本書は歴史方面からのアプローチではない。しかしファシスト作家研究が超領域的視点を要求する以上，本書のような人類学方面からの試みもまた不可欠なものであろう。本書がドリュ研究に持つ意義は限りなく大きい。

註

1）たとえば歴史家ミシェル・ヴィノックは，小説『ジル』を論じながらも，主人公がドリュの分身であり，ふたりは等号で結ばれるべき存在であると信じて疑わない。Voir Michel WINOCK, «Une Parabole fasciste : *Gilles* de Drieu la Rochelle», *Edouard Drumont et Cie. Antisémitisme et fascisme en France*, Paris : Éd. du Seuil, pp. 151–180.

2）Frédéric SAUMADE, *Drieu la Rochelle, l'homme en désordre*, Paris : Berg International, 2003, 159 pp.

3）注記のかたちではあるが，カリスマと笑いをめぐるソマドの分析にはじつに興味深いものがあるので，紹介しておきたい。まず著者は，ドリュが描いたジャック・ドリオの肖像が英雄的指導者どころか，ドリュの意図を裏切って，じつに滑稽なものとなってしまっている点に注意を促す。じじつドリュは，ドリオを賛嘆する肝心の場面で，失笑を誘うような初歩的文法ミスさえ犯してしまっているのだ。だがソマドによれば，笑いこそがカリスマ的権力には不可欠なのだという。秩序壊乱者は，まず真面目なものから狙い撃ちにする。「共和国的価値と威厳を破壊しようと，驚くほど巧みに嘲弄的なレトリックを操って，彼は信奉者たちを魅惑する。崇拝者たちはといえば，カリスマの機知に，喉を鳴らす親しげな笑いで応える。この笑いとは，〈他者〉を嘲笑的に拒絶することで結ばれた共同体の笑いなのである」。なるほど，たしかに周囲が皆笑うとき，それを拒絶することは難しい。否，著者も言うように，笑いとはそれ自体が共同体への誘いなのであり，「異議を唱えようとする意志の圧殺」なのである。まさに「人は怒りではなく，笑いで殺すのだ」（Friedrich NIETZSCHE, *Ainsi parlait Zarathoustra*, Paris : LGF, 1983, p. 56）。著者の自負するごとく，いまだかつて検討されたことのない，カリスマと笑いをめぐる関係は，はるかドリュ論を越えて，ファシズムそのものを論じうる射程を持ったものといえよう。